

役割語史の可能性を探る (1)

—平安時代における年長者の男性の会話文をめぐって—

西田隆政 (甲南女子大学)

1 はじめに

金水 (2003) で提起された役割語は、10年あまりを経て、日本語研究においても、また社会一般でも認められるものとなった。それを象徴するのが『<役割語>小辞典』(金水 2014) の刊行で、マンガや小説など、いわゆるエンターテインメント作品での登場人物の用語が、詳細に解説されているものである。

役割語については、その存在自体に歴史的な背景のあることが金水 (2003) 以来指摘されている。そして、現在もその経緯や変化の有り様についての研究は、金水 (2014) 等で着実に進められている。

ただ、その研究は、近世半ば以降のものが中心で、中世や古代にまでさかのぼる研究は、可能性は指摘されるものの、いまだ不十分という段階である。本発表では、その点について、平安時代での役割語の可能性を、和文作品における、年長者、中でも思慮深く重厚な性格とされる男性の会話文を中心に探ろうとするものである。

2 役割語の可能性

平安時代の会話文にも役割語の存在する可能性のあることについては、すでに、高山 (2007) 金水 (2008) で指摘される場所である。築島 (1963) でとりあげられた、「源氏物語」での儒者の博士のような、登場人物の独自の用語について、それが役割語の可能性があることが、あらためて提起されている。

- (1) 「おほし垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとなるなにがしを知らずしてや朝廷に仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」など言ふに、人々みなほころびて笑ひぬれば、また、「鳴り高し。鳴りやまむ。はなはだ非常なり。座を退きて立ちたうびなん」など、おどし言ふもいとをかし。

(『源氏物語』③少女 pp. 24-25) *以下引用は『新編古典文学全集』小学館

従来、(1) のような例は、和文の作品の中に、「はなはだ」「ずして」等の漢文訓読語が使用された、文体上の位相の問題と考えられてきた。そこに役割語という登場人物の造形を意図する表現の可能性を見ようとするのが、新しい考え方である。

次章以降では、「源氏物語」から、年長者の男性の会話文の例で、彼らが会話の相手である聞き手に対して、意見を述べたり、自分の考えを説明したりする例を取り上げて、そこで使用される文末表現を中心に、役割語の可能性を探っていくことにする¹。

3 男性の会話文 (1) ー桐壺院から光源氏・朱雀帝へー

まず、光源氏の父親である桐壺院の例を取り上げる。桐壺院は、帝在位の折から、息子である光源氏には、たびたび苦言を呈し、教訓を垂れることがある。(2) は、帝在位時に、左大臣の娘である正妻の葵の上に対して愛情の薄いと評判の立つことを注意している例である。

(3) は退位後の例で、故皇太子の妻であった六条御息所をないがしろにしているとのうわさを耳にして、厳しく注意をしている例である。

(2) 内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらしを、などか情けなくはもてなすなるらん」とのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御答へも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思しめす。(『源氏物語』①紅葉賀 p. 334-335)

(3) 院にも、かかることなむと聞こしめして、「故宮のいとやむごとなく思し時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色のあしければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。

¹ 役割語での「老人語」や「博士語」に対応する可能性も考えたい。文末の形式の特徴を探るのもその一環である。

ともに、地位もあり、しかるべくお相手をしなければならない、女性へのもてなし方を注意している例である。(2)では、「どうして情けのないもてなし方をするのか(いやそれをしてはならない)」と、いわゆる反語を使用し、(3)では、「いとほしきこと」や「世のもどき負ひぬべきことなり」と、形式名詞「こと」の文末、形式名詞「こと」と連体「なり」(以下「ことなり」)の文末を使用している。

反語の例は、光源氏の行為への批判をする例である。一方、「こと」の例は光源氏の行為がどのように問題となるのかを指摘し、「ことなり」の例は、その行為が世間から非難を受けることを指摘している。

光源氏の父であり、彼を指導する立場にある、桐壺院のことばである故に、上位者から下位者へと教え諭すような会話文である。そういう状況で、かなり、厳しい口調の中で使用されている例と考えられる。

(4) 故院ただおはしまししさまながら立ちたまひて、「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。

「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはす。いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。

(『源氏物語』②明石 pp228-229)

(4)は、自分の死後、光源氏の須磨蟄居の際に、夢枕で語った例である。反語を使用して、「どうしてこんなところにいるのか」と厳しく叱責し、住吉の神のお告げに従って浦を出るように命じて、光源氏の弱気の発言を「あるまじきこと」と「こと」の文末で誤りであることを指摘する。そして、「物の報いである」と連体「なり」の文末でその理

由を指摘して、「内裏に奏上することがあるから上京する」と、係助詞「なむ」の結びのある文で会話文をまとめて、夢枕から去っていく。

(2) や (3) と同様に、(4) でも、「こと」の文末や連体「なり」の文末が使用される。この傾向を探るために、朱雀帝への桐壺院の会話文を見ていくことにする。

- (5) 内裏にも思し嘆きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を、かへすがへす聞こえさせたまひて、次には大将の御事、「はべりつる世に變らず、大小のことを隔てず何ごとも御後見と思せ。齡のほ
どよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうなむ見
たまふる。かならず世の中保つべき相ある人なり。さるによりて、わづらはしさに、親王にもなさず、ただ人にて、朝廷の御後見をせ
させむと思ひたまへしなり。その心違へさせたまふな」と、あはれ
なる御遺言どもおほかりけれど、女のまねぶべきことにしもあらねば、この片はしだにかたはらいたし。

(『源氏物語』②賢木 pp. 95-96)

- (6) 三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。

(『源氏物語』②明石 p. 251)

桐壺院は、同じ息子である、光源氏の兄朱雀帝へも、同様に自らの要望を述べる例がある。ただし、相手はすでに帝であり、光源氏へのような上位者から注意をするといったものとはならない。(5) は、退位して、さらには病床の身でありながら、光源氏のことを朱雀帝へお願いするという文脈である。なお、(6) は、(4) からつながる例で、帝の夢枕に立つが、ここでは会話文は使用されない。

先の (2) (3) (4) とは会話文としてのあり方が相違する例ではあるが、連体「なり」の文末で説明すべき事柄を指摘し、係助詞「なむ」

の結びの文末で自身の考えを述べようとしており、この使用法は通じるものである。とすると、ここまでの例に見られる文末の形式は、ある種の表現効果を持ったものと考えられるのではなかろうか。特定の意図を持った文において、使用されることが多いことにもなる。

次章では、桐壺院と同じく光源氏を教え諭すこともある、左大臣の会話文を見ていくことにしたい。年齢 60 歳台の人物である²。

4 男性の会話文 (2) 一左大臣から光源氏一

ここで見る、左大臣は光源氏の最初の北の方である葵の上の父親である。臣下としての身分は光源氏よりも上であるものの、帝の息子である光源氏に対しては非常に丁寧なことば遣いをしている。(7) にあるように「世の重し」とされ、非常に重厚な人柄の人物とされる³。

(7) そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。世の重しとおはしつる人なれば、おほやけにもおぼしなげく。 (『源氏物語』②薄雲 p. 442)

(8) 大臣渡りたまひて、一日の興ありしこと聞こえたまふ。「ここの年齢にて、明王の御代、四代をなむ見はべりぬれど、このたびのやうに、文ども警策に、舞、楽、物の音ども調ほりて、齡延ぶることなむはべらざりつる。道々の物の上手ども多かるころほひ、くはしうしろしめし調へさせたまへるけなり。翁もほとほと舞ひ出でぬべき心地なむしはべりし」と聞こえたまへば、

(『源氏物語』①花宴 pp. 361-362)

(8) は、光源氏の試楽での舞を称賛するところで、四代の帝に仕えて、これほど「寿命の延びるようなことはございませんでした」と、係助詞「なむ」の結びの文末で述べる。さらには、その理由が「道々の物の上手がいる故」と連体「なり」の文で述べる。もう一例、係助詞「なむ」の結びの文があり、光源氏に対して、丁寧語の動詞とされる「はべり」を多用した、丁寧な物言いではあるものの、素晴らしき帝の御代であることを、説明して伝えようとしている会話文である。

上からの教え諭すような会話文ではないが、このような説明をする

² 63 歳で太政大臣になったとある (②濤標 p.283)。

³ 他には、「世の重し」「重き御後見」(②賢木 p.138) とある。

文においては、(3) (4) と同様の文末の形式が使用されている点が注意される。

- (9) 大臣久しうためらひたまひて、「齢の積もりには、さしもあるまじきことにつけてだに涙もろなるわざにはべるを、まして干る世なう思ひたまへまどはれはべる心をえのどめはべらねば、人目もいと乱りがはしう心弱きさまにはべるべければ、院などにもえ参りはべらぬなり。事 のついでには、さやうにおもむけ奏せさせたまへ。いくばくもはべるまじき老の末にうち棄てられたるがつらうもはべるかな」と、せめて思ひしづめてのたまふ気色いとわりなし。
〔『源氏物語』②葵 pp. 62-63〕
- (10) 「思し棄つまじき人もとまりたまへれば、さりともものついでには立ち寄せたまはじやなど慰めはべるを、ひとへに思ひやりなき女房などは、今日を限りに思し棄てつる古里と思ひ屈じて、永く別れぬる悲しびよりも、ただ時々馴れ仕うまつる年月のなごりなかるべきを嘆きはべるなるなむことわりなる。うちとけおはしますことははべらざりつれど、さりともつひにはと、あいな頼めしはべりつるを。げにこそ心細き夕べにはべれ」とても泣きたひぬ。
〔『源氏物語』②葵 pp. 63-64〕
- (11) 「過ぎはべりにし人を、世に思うたまへ忘るる世なくのみ、今に悲しびはべるを、この御事になむ、もしはべる世ならましかば、いかやうに思ひ嘆きはべらまし、よくぞ短くて、かかる夢を見ずなりにけると、思うたまへ慰めはべり。幼くものしたまふが、かく齢過ぎぬる中にとまりたまひて、なづさひきこえぬ月日やへだたりたまはむと思ひたまふるをなむ、よろづのことよりも悲しうはべる。いにしへの人も、まことの犯しあるにしてしも、かかる事に当たらずりけり。なほさるべきにて、他の朝廷にもかかるたぐひ多うはべりけり。されど、言ひ出づるふしありてこそ、さることもはべりけれ。とざまかうざまに思ひたまへよらむ方なくなむ」など多くの物語聞こえたまふ。
〔『源氏物語』②須磨 pp. 166-167〕

(9) (10) (11) は、葵の上の死後、光源氏と左大臣を取り巻く状況が

一変した際の会話文である。しかし、自らの意見を述べる連体「なり」の文末、相手に伝えたい事柄を示す係助詞「なむ」の結びの文末の文が使用される点については、先の例と同様である。

(9) は葵の上死去の後は心が弱ってしまい桐壺院のもとに参内することもできないことを説明する例、(10) は光源氏に長年お側にお仕えできる機会もなくなってしまうことを女房たちが嘆いているのも当然のことと説明する例、(11) は葵の上が早く亡くなったから光源氏が都を離れ須磨に行くようになってしまうことを見ずに済んでよかったと説明する例である。とりわけ、(10) と (11) の 2 例は、左大臣が何としても光源氏にお伝えしたいと考えている事柄に該当する。

係助詞「なむ」の結びの文は、そういう点で、ここまでに取り上げた会話文で、非常に表現効果のあるものとして、使用されている可能性がある。その点を、さらに考えるために、次章では、明石の入道の会話文を見ていくことにしたい。

5 男性の会話文 (3) 一明石入道と光源氏一

明石入道は、光源氏との間に姫君のちの明石の中宮を産む、明石の方の父親である。(12) にあるように年齢は 60 歳台にもなる、人物である。

(12) 年は六十ばかりになりたれど、いとよげに、あらまほしう、行ひさらぼひて、人のほどのあてはかなればにやあらむ、うちひがみほればれしきことはあれど古昔のものをも見知りて、ものきたなからずよしづきたることもまじれば、昔物語などせさせて聞きたまふに、すこしつれづれの紛れなり。

(『源氏物語』②明石 p. 238)

(13) 「いととり申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるとなん思うたまふる。そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいときなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとにならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みず

からの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなん念じはべる。前の世の契りつたなくてこそかく口惜しき山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたもちたまへりき。みづからかく田舎の民となりにてはべり。次々さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらんと悲しく思ひはべるを、これは生まれし時より頼むところなんはべる。いかにして都の貴き人に奉らんと思ふ心深きにより、ほどにつけて、あまたの人のそねみを負ひ、身のためからき目をみるをりをり多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。命の限りはせばき衣にもはぐくみはべりなむ、かくながら見棄てはべりなば、浪の中にもまじり失せね、となん掟てはべる」など、すべてまねぶべくもあらぬことどもを、うち泣きうち泣き聞こゆ。(『源氏物語』②明石 p. 244-246)

(13) は、明石の入道が光源氏に自らの身の上と娘のことを語りだしている会話文である。大部分の文で、係助詞「なむ」の結びが使用されている。光源氏に丁寧に説明して、自らの長年の念願を理解し、何としても娘に興味を抱いてほしいという気持ちのこもった会話文といえよう。目上の光源氏に対して、懸命に説明を行っている。

その中でも、5行目の「十八年になりはべりぬ」や16行目の「苦しみと思ひはべらず」は、光源氏に訴えかけて説明するというよりも、説明上必要な事実関係の提示ともいえる文で、ここには「なむ」の結びは使用されていない。そのような点での使い分けが見て取れる点でも興味深い会話文である。

また、光源氏は、明石の入道にとって、本来簡単に会話のできるような身分ではない故に、伝えるべき事柄を直接的に述べる「こと」の文末や連体「なり」の文末は使用されていない。ただし、対等の立場での会話文なら、明石の入道も上記のような例を使用することがある。

(14) 母君に語らふやう、「桐壺更衣の御腹の源氏の光君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦にもものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことあるなり。いかでかかるついでに、この君に奉らむ」と言ふ。
(『源氏物語』②明石 p. 210)

(15) いといたくつぶやく。「罪に当たることは、唐土にもわが朝廷に

も、かく世にすぐれ、何ごとにも人にことになりぬる人のかならずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、按察使大納言の御むすめなり。いと警策なる名をとりて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへるいとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとて、思し棄てじ」など言ひゐたり。

(『源氏物語』②明石 p. 211)

(14) と (15) は、明石の入道から妻である明石の尼君への一連の会話文である。妻に対して、光源氏のことを説明する際には、連体「なり」や「こと」と連体「なり」の文末を使用して、はっきりと自分の意見を表明している。これは、このような男性が対等の立場の者や自分より下位の者には、連体「なり」の文末を使用していることへの理解される例である。

6 係助詞「なむ」の文末の例

今回の検討で取り上げた会話文においては、係助詞「なむ」の結びのある文が、非常に重要な意味を持つことが理解された。そこで、次に、会話文等で係助詞「なむ」の結びの述語のない例を見てみる。和文の会話文においては、係助詞の「なむ」は結びが存在せず、「なむ」が文末となっている例を数多く見ることができる。

(16) 「知らぬ世界に、めづらしき憂への限りを見つれど、都の方よりとて、言問ひおこす人もなし。ただ行く方なき空の月日の光ばかりを古里の友とながめはべるに、うれしき釣舟をなむ。かの浦に静やかに隠るふべき隈はべりなんや」とのたまふ。

(『源氏物語』②明石 p. 233)

(17) 「横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。都離れし時より、世の常なきもあぢきなう、行ひよりほ

かのことなくて、月日を経るに、心もみなくづほれにけり。かかる人ものしたまふとほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ棄てたまふらめと思ひ屈しつるを、さらば導きたまふべきにこそあなれ。心細き慰めにもなどのたまふを、限りなくうれしと思へり。 (『源氏物語』②明石 p. 246-247)

(16) (17) は、ともに、光源氏から明石の入道への会話文である。光源氏は、上位者であり、なおかつまだ親しくない者への貴族としての会話故、直接的な物言いをしていない。(16) では、屋敷も焼けてしまい、厳しい境遇にいる中、迎えに来てくれたのは非常にうれしいことであるが、それを「うれしき釣舟をなむ」とする。(17) では、明石の入道が光源氏の到来を住吉の神のお告げと考えて高き望みのあることを申し述べたのに対して、この出会いが前世からの因縁のある故と知って感動していることを「あはれになむ」とする。

このように、係助詞の「なむ」は、係り結びの結びを行わず、文末に使用することで、直接的に自らの感慨を述べるというよりも、相手に働きかけて、そういう気持ちになっていることを、相手に察してもらおうとする表現と理解される。

阪倉 (1993) では、「なむ」という語は、右に見たような (ママ) 確信的な態度を持って、これを相手に持ちかけ、反応を確かめようとする気持を表すものであった。文中で特に要点と思われる語句の後にこれを添えることによって、その語句を卓立させ、もって解説的叙述の効果が高められたのである」(p. 234) と指摘される⁴。

係助詞「なむ」の結びの述語で文が終止した際には、上記のような表現効果があったと考えられ、それは、先に述べた例に該当するものである。一方、係助詞「なむ」で文が終止する際には、語句の卓立はあるものの、それをこうである結ぶことをしない故に、解説的な叙述というよりも、「相手にもちかけ、反応を確かめよう」とする側面が中心となる表現と推測される。

係助詞「なむ」の使用される文は、相手への働きかけを持つものであるが、述語による文末の結びのある例と「なむ」が文末となる例では、以上のべたような、相違があると考えられるのである。

⁴ 阪倉 (1993) では、この説明のために、近藤 (1979) を注にあげている。

7 年長者の男性の会話文から見えるもの

ここまでに見た、3人の年長の男性の会話文から、どのようなことが理解されるだろうか。まず、相手に自分の状況や考えを説明する際には、係助詞「なむ」の結びのある文が使用される。そして、相手に対して、何らかの教訓や意見を明確に述べる際には、形式名詞「こと」の文末や連体「なり」の文末が使用される。

それに対して、このような会話文に見られない文末の例がある。それは、係助詞「ぞ」の結びのある文と連体形終止の文と、いわゆる「言いさし」とされる文等である。

このことが意味する点については、さらに検討の必要があるが、相手への働きかけのあり方や、文の述べ方という点で、ある種の傾向のあることが見て取れたといえる。それは、重厚な人柄で、かつ、年長者という人生経験のある者からのことばとして、ふさわしい言い方であったと理解されていたのではないかと、推測するのである。

8 おわりに

以上、見てきたことを、役割語の歴史という面からすると、どのように位置づけることができるであろうか。金水（2015）では、新しい役割語の定義として、以下のものを提案している。

- (18) (フィクションにおける、) 社会的属性と、特定の様式を持った言語が結びついているという知識が社会的に共有されているとき、その言語を「役割語」と呼ぶ。

(18) の定義からすると、今回指摘したような言語表現は、年長者の登場人物（キャラクター）の会話文として似つかわしく、かつ、よく見られるものではあるものの、まだ社会的な共有知識としての「役割語」にまでは至っておらず、現代の博士語とされる「～じゃ」「～のう」のような文末の語形とは相違するということになる。今後は、他の時代の作品の登場人物の言語表現についても、役割語の可能性という観点から、検討していくことにしたい。

参考文献

- 金水敏 2003『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏 2014 a 「フィクションの話し言葉について 役割語を中心に」石黒圭・橋本行洋編 2014『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房
- 金水敏 2014 b 『コレモ日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』岩波書店
- 金水敏編著 2014『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏 2015「キャラクター言語から役割語へ」 役割語・キャラクター言語研究 国際ワークショップ発表資料（2015年2月17日於大阪大学会館講堂）
- 近藤泰弘 1979「構文上より見た係助詞〈なむ〉－〈なむ〉と〈ぞーや〉との比較一」『国語と国文学』56－12（近藤（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房 所収）
- 阪倉篤義 1993『日本語表現の流れ』岩波書店
- 定延利之 2011『日本社会のぞきキャラくり 顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
- 関一雄 2009『平安時代の動画的表現と役柄語 これからの日本語史研究のために』笠間書院
- 高山倫明 2007「訓読語と博士語」九州大学大学院人文科学研究院（文学部）平成19年度社会連携セミナー①言語と文芸—和漢古典の世界 第1回 2007年7月28日（於福岡市文学館）
- 築島裕 1963『平安時代の漢文訓読語に就きての研究』東京大学出版会
- 野村剛 2011『話し言葉の日本史』吉川弘文館
- 森野宗明 1975『王朝貴族社会の女性と言語』有精堂
- 山口仲美 1998 a 『平安朝の言葉と文体』風間書房
- 山口仲美 1998 b 「源氏物語の「男の表現」・「女の表現」」増田繁夫・鈴木日出夫・伊井春樹編『源氏物語研究集成第3巻 源氏物語の表現と文体上』（風間書房）所収
- 西田隆政 2014 a 「平安和文の会話文の「文体」をめぐって」『文学史研究』54
- 西田隆政 2014 b 「メディアとしての平安和文」『国語語彙史の研究33』和泉書院

付記：本稿は、2014年12月14日、西宮市大学交流センターで開催された、文法史研究会での発表「役割語の歴史（1）—平安時代の男性の会話文をめぐって—」を加筆、修正して、成稿したものである。席上、ご意見いただいた方々には、あつく御礼申しあげます。